

キャンパス・コラム

イスラムと日本人

先日、富山県のある町で、パキスタン人が経営する店の前に、イスラムの聖典クルアーン（コーラン）が引き裂かれて捨てられるという事件が起きた。一部のムスリム（イスラム教徒）が事件が起きた町や東京などで抗議デモを行なったことは、新聞やテレビでも報道されたから、ご存じの読者も多いだろう。だが、日本にあるイスラム系の大きな団体（宗教法人）がいずれもこういった行動を自粛したことは、あまり知られていない。

日本最大のイスラム系団体の理事で、総合政策学部の講師をしていただいているインド人ムスリムの先生は、聖典を引き裂かれたことには怒りをおぼえるが、日本人のイスラムに対するイメージが悪化することを危惧して、抗議のデモを自粛した、とっておられた。アフガニスタンのイスラム過激派政権が、パーミヤンの大仏を破壊したことで、ただでさえ日本人

のイスラムに対するイメージが悪くなっている矢先に、大規模なデモを行なったりして、これ以上「イスラムは恐い宗教」と思われたくないというのである。

現在ムスリムは世界中に10億人以上いるといわれるが、イスラムは日本ではいぜんとして馴染みのない宗教である。総合政策学部には、アラビア語、ペルシア語、マレー・インドネシア語などイスラム世界の言語の講座があるので、数人ではあるがムスリムの先生が教鞭をとっている。私の知るかぎり、他学部の先生や留学生のなかにも、ムスリムの人たちがいる。世界中のムスリムのなかにも、「過激派」と呼ばざるをえない者がいるのは確かだが、日本にいるムスリムの多くは穏健な人たちで、日本の習慣に可能なかぎり従いながら、自分たちの信仰を守っている。その数はすでに10万人を超えたとされ、私たちのまわりにもこうしたムスリムの人たちがいるのがふつうの状態になった。世界の3大宗教のひとつに数えられるイスラムについて、もっと理解を深めたいものだ。

広報委員 清水 芳見（総合政策学部教授）

編集後記

「雨にもまけず…」という宮沢賢治の詩、この出だしを知っている人は沢山いると思う。賢治を好きな人なら「暗記しています。」という人だっているかも知れない。ところが、この詩には面白い逸話がある。▼賢治が亡くなった後、友人であった高村光太郎は、賢治を偲んで一つの碑を作り、その碑に「雨にもまけず…」の詩の後半部分を彫らせた。ところが記憶に頼って詩を彫らせたために何か所かで間違えてしまった。恥ずかしく思った光太郎は、後でこの碑に修正を加えた。▼私はこの話を聞いた時に、光太郎のいい加減さだけが心に残ってしまった。ところが、先日岩手まで出掛け、実際にこの碑を見た時、光太郎の人間臭さと暖かさを感じられたのだ。▼同じ碑のまちがいの事実でも、知識として捉えた時と実際に自分の目で見て感じたものでは、全く違う思いが生じたのである。できることなら人から聞いた知識だけに頼らず、自分の経験から生まれた感覚を大切にしたいと考えさせられたことだった。

（広報課）

Hakumon
ちゅうおう

2001・7月号（第168号）

2001年（平成13年）7月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12

電話 03-3631-8141